川村学園女子大学研究紀要　第18巻　第1号　109頁―122頁　2007年

恥意識に関する文化比較および世代間比較[1) 2) 3)]

松　井　　洋*・中　村　　真**
堀　内　勝　夫***・石　井　隆　之****

"Shame, A Cross Cultural and Intergenerational Study"

MATSUI, Hiroshi, NAKAMURA, Shin, HORIUCHI, Katsuo and ISHII, Takayuki

要　旨

日本とトルコの中学生，高校生，大学生，親，3820人を対象に，恥意識について調査を行い，日本とトルコの文化比較と世代間比較を行った。

親に対する質問項目の因子分析の結果，「他律的恥意識」，「他者同調的恥意識」，「自律的恥意識」の3因子を抽出した。この3因子構造は，生徒とほぼ同一であった。

この3因子を基に層別の分散分析の結果，3つの恥意識について，グループ間に有意な違いがあった。

自律的恥意識は，トルコの父母とトルコの中学生女子，それに日本の母が高く，日本の若年層で低い。

他律的恥意識は，おおむね，大人，女子，男子という順になった。

他者同調的恥意識は，日本の女子とトルコの中学生が高く，日本の父親が最も低かった。

以上のことから，恥意識の強さは文化と世代によって質的に異なると言える。つまり，世代や文化によって，恥を感じる場面が異なる。

日本の親は，自律的恥意識と他律的恥意識が強く，子どもは他者同調的恥意識が強い。また，女子は他律的恥意識と他者同調的恥意識が男子より強い。

このようなことは，日本の若年層で問題行動を抑止する恥意識が弱いことを示している。このことは，わが国における恥意識の質が変容した可能性を示していると考えられる。

キーワード：恥意識，国際比較，世代間比較，トルコ

---

*教授　社会心理学
**助教授　社会心理学
***産業能率大学
****非常勤講師　日本・精神技術研究所

問題

著者らは，日本の青少年の問題行動を抑止する要因について，20年近く研究してきた。抑止する要因として，道徳意識，愛他性，共感性，価値観などを取り上げてきた。そして，最近は恥意識を抑止する要因として取り上げている（堀内他2004，松井1991, 1997, 1998, 1999, 2000, 2001, 2002, 2003, 2004，松井他1995, 1998, 2004, 2005, 2006，永房他2004，中村他2004，中里他1992, 1993, 1996, 1997, 1999, 2003）。

松井他（2006）では，日本とトルコの中高生を対象にした2004年の調査を基に恥意識と非行許容性を中心に分析を行っている。恥意識について，従来，適応を妨げる否定的要因というとらえ方が多かった。しかし，われわれは，恥意識が問題行動を抑止する要因として機能するのではないかと期待しているのである。この研究はそのような視点から行なわれた。調査結果は以下のとおりであった。

日本の中高生はトルコの中高生と比較して，道徳意識が低く，非行的行為に対して許容的という傾向があった。また，恥意識については，自律的恥意識と他律的恥意識は，概ねトルコが日本より高く，男子より女子，高校生より中学生が高い傾向があった。しかし，他者同調的恥意識は，男子より女子，高校生より中学生が高いという傾向は前2者と同様だが，他の恥意識とは異なり，トルコより日本が高かった。

非行許容性を従属変数とした重回帰分析の結果は，日本の生徒では非行許容性は他律的恥意識によって説明され，他律的恥意識が強いほど非行を許容しないと考えられ，次に，道徳意識が強いほど非行を許容しないという関係であるが，トルコの中高生の非行許容性は道徳意識によって説明され，恥の意識とは関係が無いということが言える。つまり，日本では恥意識が非行許容性を抑止する機能があると言えるのである。ただし，恥意識であっても，仲間と同調するような，他者同調的恥意識では抑止機能は期待できないのである。つまり，どのようなことに恥を感じるのかという，恥意識の質の問題である。

以上のように，わが国では非行許容性という非行につながる態度に対して，恥意識が抑止力を持つと言えるだろう。しかし，日本の若年層では，抑止力を持つと考えられる種類の恥意識はむしろ弱いのである。

ところで，2004年の調査では中高生だけではなくその親についても調査を行っているが，松井他（2006）では，その分析は行わなかった。また，2006年には日本の大学生についてあらためて同様の調査を行った。そこで，日本の中学生，高校生，大学生，親，トルコの中学生，高校生，親の結果を基に，恥意識の世代間の比較と国際比較を行いたいと思う。これによって，

問題行動を抑止する恥意識について，その問題を考えていきたい。

なお，恥意識と，非行許容性，そして親子関係などの，他の要因との関係については，中村を中心に別の論文で分析する予定である。

方法

1. 調査対象者

中高生とその親についての調査は，日本の北海道，青森，岩手，茨城，静岡の5道県における8校（中学校5校，高等学校3校）で2004年に実施された。

トルコでは，イスタンブール近郊とダータネル海峡に面した小都市チャナッカレである。

大学生の調査は2006年に東京及び近郊の大学で実施した。

サンプル数は表1の通りである。

表1 2004と2006年の調査対象者数

	日　本	トルコ	合　計
中学生（男女）	402	180	582
高校生（男女）	645	261	806
大学生（男女）	518		518
小　計	1565	441	2006
中高校生父親	503	350	853
中高校生母親	589	372	961
小　計	1092	722	1814
合　計	2657	1163	3820

2. 調査方法

質問紙による調査を行った。調査依頼に応じていただいた各学校へ調査票を送付し，クラス単位で調査票の配布，記入，回収する方法をとった。

3. 調査票の構成

中学生，高校生，大学生の調査票は，恥意識に関する質問（4件法，25項目），愛他性に関する質問（4件法，5項目），非行許容性に関する質問（4件法，10項目），価値観に関する質

問（4件法，12項目），父親および母親に対する心理的な距離に関する質問（4件法，各14項目），道徳意識に関する質問（4件法，10項目）およびフェースシートから構成された。

なお，親についての調査は，中高大学生に準じて作ったが，恥意識についても，大人には不適当な質問などを除いて作った。中高大学生用の質問紙は松井他（2006）を参考にされたい。

以上の質問項目のうち，本論文では，生徒，親に共通する恥項目18項目について分析する。

4. 調査期間

調査期間は，2004年9月～12月および，2006年4月～5月である。

結果

1. 日本の親の恥意識

日本の生徒用の恥意識項目から，学校場面や親からの叱責など親には回答できない項目7項目を削除して18項目による親の恥意識項目を作成した。

日本の親から得られたデータにより，探索的に因子分析を行った。最尤法，プロマックス回転，3因子抽出でまとまりの良い結果を得た（表2参照）。

第1因子は，

「4　かんでいたガムを道ばたにすてたとき」

「8　電車やバスの中で携帯電話をかけて大きな声を出したとき」

「2　静かな病院の中で大声でさわいでしまったとき」

など5項目から構成され，公共の場面における行為についての項目で構成された。これらの項目は，日本の生徒の因子分析における「他律的恥意識」の項目であるので，ここでも「他律的恥意識」と命名した。

第2因子は，

「14　町で自分のファッションを変な目で見られたとき」

「17　友人に自分の失敗を笑われたとき」

「15　みんなができることを自分だけできなかったとき」

など6項目から構成され，このうち5項目が日本の生徒の因子分析における「他者同調的恥意識」の項目であったため，ここでも「他者同調的恥意識」と命名した。

第3因子は，

「 9　自分で決めたことを守れなかったとき」

「16　自分が正しいと思ったことができなかったとき」

表2　恥意識に関する日本の親の因子分析結果

		因子 1	因子 2	因子 3	共通性
4	かんでいたガムを道ばたにすてたとき	0.65	−0.09	0.04	0.44
8	電車やバスの中で携帯電話をかけて大きな声を出したとき	0.64	0.06	−0.04	0.41
2	静かな病院の中で大声でさわいでしまったとき	0.64	0.08	−0.12	0.35
18	電車やバスで2人分の席をひとりじめして座っているとき	0.63	−0.04	0.09	0.46
13	とめてはいけないところに自転車をとめたとき	0.50	0.02	0.24	0.46
14	町で自分のファッションを変な目で見られたとき	0.13	0.75	−0.17	0.54
17	友人に自分の失敗を笑われたとき	−0.01	0.65	0.06	0.45
15	みんなができることを自分だけできなかったとき	−0.02	0.61	0.17	0.47
10	みんなが知っている話を自分だけ知らなかったとき	−0.09	0.60	0.14	0.41
6	自分だけが流行の物を持っていなかったとき	−0.18	0.54	0.05	0.29
5	自分だけその場にふさわしくない服装をしていたとき	0.37	0.47	−0.15	0.35
9	自分で決めたことを守れなかったとき	0.06	−0.06	0.65	0.45
16	自分が正しいと思ったことができなかったとき	−0.02	0.16	0.56	0.39
12	友人に自分の気持ちをはっきり言えなかったとき	−0.06	0.23	0.55	0.41
3	努力が足りなくて目標を達成できなかったとき	−0.01	0.05	0.54	0.31
11	悪いことをしたのにだまってそれをかくしているとき	0.34	−0.09	0.41	0.42
7	友人との約束を破ってしまったとき	0.33	−0.10	0.33	0.32
1	友人に思わずウソをついてしまったとき	0.31	−0.10	0.31	0.27
	固有値	5.26	2.44	1.28	
	寄与率（%）	29.24	13.55	7.11	
	因子間相関（第2因子）	0.25			
	因子間相関（第3因子）	0.60	0.36		

「12　友人に自分の気持ちをはっきり言えなかったとき」

など7項目から構成され，全ての項目が日本の生徒の因子分析における「自律的恥意識」であったため，ここでも「自律的恥意識」と命名した。

2. 恥意識の因子の親子の違い

日本の親，子別に恥意識の18項目の因子分析結果の違いを示したのが表3である。結果としては，表3のように，日本の生徒と父母では「他者同調的恥意識」の項目構成に若干の違いはあるが，ほぼ同じ因子を抽出できた。なお，この表では，日本の生徒の因子分析結果に合わせるように，親の結果は因子と項目の順番を変更している。

3. 属性の違いによる恥意識の違い

因子分析によって，日本の親と子供では恥意識の構造に違いが見られた。しかし，自律的恥意識，他律的恥意識，他者同調的恥意識，という3つの恥意識として解釈することができる因子が共通して抽出された。

表3　日本の生徒と親の因子分析結果比較表

	日本の生徒の因子分析結果	日本の親の因子分析結果
自律的恥意識	12　友達におもわずウソをついてしまったとき	1　友人に思わずウソをついてしまったとき
	8　自分で決めたことを守れなかったとき	9　自分で決めたことを守れなかったとき
	7　友達との約束をやぶってしまったとき	7　友人との約束を破ってしまったとき
	13　悪いことをしたのにだまってそれをかくしているとき	11　悪いことをしたのにだまってそれをかくしているとき
	11　親との約束を破ってしかられたとき	
	18　自分が正しいと思ったことができなかったとき	16　自分が正しいと思ったことができなかったとき
	23　試験勉強をしようと決めていたのに，なまけてしまったとき	
	22　いじめられている友だちを助けられなかったとき	
	3　努力が足りなくて目標が達成できなかったとき	3　努力が足りなくて目標を達成できなかったとき
	17　友達に自分の気持ちをはっきり言えなかったとき	12　友人に自分の気持ちをはっきり言えなかったとき
他律的恥意識	16　授業に遅れて先生にしかられたとき	
	19　電車やバスの中で携帯電話をかけて大きな声を出したとき	8　電車やバスの中で携帯電話をかけて大きな声を出したとき
	1　宿題を忘れて先生にしかられたとき	
	4　とめてはいけないところに自転車をとめたとき	13　とめてはいけないところに自転車をとめたとき
	24　かんでいたガムを道ばたにすてたとき	4　かんでいたガムを道ばたにすてたとき
	14　静かな病院の中で大声でさわいでしまったとき	2　静かな病院の中で大声でさわいでしまったとき
	21　家で自分だけ勝手なことをしてしかられたとき	
	9　電車やバスで2人分の席をひとりじめして座っているとき	18　電車やバスで2人分の席をひとりじめして座っているとき
	2　友達に自分の失敗を笑われたとき	
	6　してはいけないことを親に見つかったとき	
他者同調的恥意識	15　みんなが知っている話を自分だけ知らなかったとき	10　みんなが知っている話を自分だけ知らなかったとき
	10　自分だけが流行の物をもっていなかったとき	6　自分だけが流行の物を持っていなかったとき
	20　町で自分のファッションを変な目で見られたとき	14　町で自分のファッションを変な目で見られたとき
	25　みんなができることを自分だけできなかったとき	15　みんなができることを自分だけできなかったとき
	5　自分だけその場にふさわしくない服装をしていたとき	5　自分だけその場にふさわしくない服装をしていたとき
		17　友人に自分の失敗を笑われたとき

ここでは，日本の親の因子分析結果を基準にして，属性の違いによる恥意識の違いを検討する。日本の親を基準にする理由は2つある。1つは，生徒と親では項目数が違い，生徒の方が多

い。友人と友達という言葉の使い方の違いはあるが，親の質問項目は生徒の質問項目に包含されているので，親の結果を使用するしかない。

２つめの理由は，われわれの研究が日本のことを知るために，違う文化圏であるトルコのデータと比較していることによるものである。つまり，日本を基準としてみると他国とどう違うのかに関心があるため，日本の結果を基準としたスケールにより比較を試みる。

1)　恥意識の層別の平均

属性毎に３つの恥意識の平均値を比較した結果が図１である。回答が４件法なので１～４点の値をとる。

日本の中学生男子は，全体的に恥意識が低く，中でも自律的恥意識はかなり低い。

日本の中学生女子は，他の２つの恥意識が男子と変わらないのに対して，他者同調的恥意識だけは格段に高くなっている。この他者同調的恥意識の高さは，日本の場合，中学・高校・大学の女子でほぼ同水準であり，女子の恥意識が男子より強かった。

日本の高校生男子は，全般的に恥意識が低い結果であった。自律的恥意識も他律的恥意識も

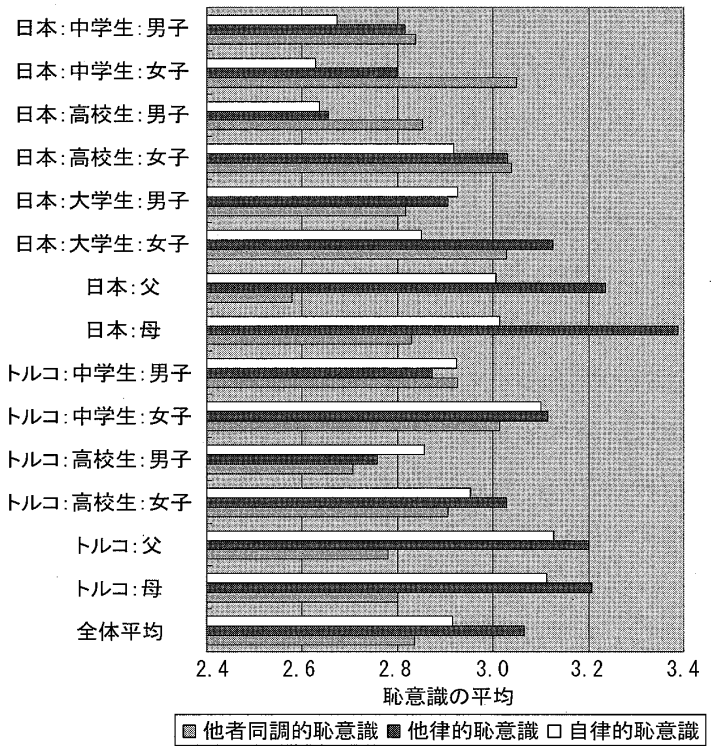

図１　層別の恥意識平均

低く，他者同調的恥意識だけが全体平均程度であった。日本の男子高校生の他律的恥意識の低さは，各層の中の最低であった

日本の高校生女子は，ほぼ全体平均程度の結果であるが，他者同調的恥意識だけは，全体平均よりも高かった。

日本の大学生男子は，自律的恥意識が最も高く，同程度で他律的恥意識，やや下がって他者同調的恥意識という順であった。

日本の大学生女子は，男子大学生とは異なり，他律的恥意識と他者同調的恥意識は全体平均よりも高く，自律的恥意識が全体平均よりもやや低いという結果であった。

日本の父親は，他律的恥意識が高く，自律的恥意識がその次であるが，他者同調的恥意識は格段に低いことが特徴的である。

日本の母親では，他律的恥意識が特に高い。層別に比べて一番である。自律的恥意識は父親とほぼ同程度であり，他者同調的恥意識は全体平均並みであり，父親よりは強い。

トルコの中学生男子は，3つの恥意識にあまり違いがなく，自律的恥意識と他者同調的恥意識が同程度であり，次に他律的恥意識という順になった。日本の男子中学生と比べると，自律的恥意識が格段に強い。

トルコの中学生女子は，3つの恥意識全てが全体平均よりも高い。日本の女子中学生と比べると，自律的恥意識，他律的恥意識は格段に強い。

トルコの高校生男子は，自律的恥意識が最も高く，次いで他律的恥意識，他者同調的恥意識の順になったが，全体平均と比較して全てやや低いという結果であった。ただ，日本の男子高校生と比較すると，他者同調的恥意識以外は強い。

トルコの高校生女子は，ほぼ全体平均と同じ傾向にあった。他律的恥意識が全体平均とほぼ同程度最も高く，次いで自律的恥意識，最後が他者同調的恥意識という順であった。日本の高校生女子より，他者同調的恥意識がやや弱く，他は同じくらいである。

トルコの父親と母親はほぼ同じ結果であった。他律的恥意識が最も高く，それとあまり変わらない程度に自律的恥意識が高い。他者同調的恥意識は全体平均程度である。

日本の場合，父親と母親では自意識に大きな違いがあるが，トルコの場合は同じ傾向にあることが分かる。

2)　恥意識の分散分析

次に3つの恥意識毎に属性の違いを見るために分散分析と多重比較を行った。その結果が表5～8である。分散分析の結果は，表5にまとめている。恥意識3尺度ともグループ間に有意

表5　恥意識3尺度の分散分析結果

		平方和	自由度	平均平方	F値
1. 自律的恥意識	グループ間	111.49	13	8.576	31.73 ***
	グループ内	1025.16	3793	0.270	
	合　計	1136.66	3806		
2. 他律的恥意識	グループ間	219.47	13	16.882	57.98 ***
	グループ内	1102.68	3787	0.291	
	合　計	1322.15	3800		
3. 他者同調的恥意識	グループ間	69.90	13	5.377	17.33 ***
	グループ内	1178.04	3796	0.310	
	合　計	1247.94	3809		

表6　自律的恥意識の多重比較の結果

		度数	1	2	3	4	5
6.00	日本：中学生：女子	207	2.63				
7.00	日本：高校生：男子	487	2.64				
5.00	日本：中学生：男子	195	2.67				
10.00	日本：大学生：女子	346		2.85			
13.00	トルコ：高校生：男子	120		2.85			
8.00	日本：高校生：女子	158		2.92	2.92		
11.00	トルコ：中学生：男子	100		2.92	2.92		
9.00	日本：大学生：男子	170		2.93	2.93		
14.00	トルコ：高校生：女子	141		2.95	2.95		
1.00	日本：父	500			3.01	3.01	
2.00	日本：母	581			3.01	3.01	3.01
12.00	トルコ：中学生：女子	80				3.10	3.10
4.00	トルコ：母	372				3.11	3.11
3.00	トルコ：父	350					3.13
	有意確率		0.44	0.09	0.12	0.07	0.05

注）多重比較はDuncan，サブグループの基準は5%未満

な違いがある。

自律的恥意識の多重比較の結果（表6）では，5つのサブグループが見出されたが，最も得点の高い第5グループから第2グループまでの差はあまり明確ではない。かなり入り組んだ結果となっている。最も得点の高い第5グループは，トルコの父母とトルコの中学生女子，それに日本の母であるが，第4及び第3グループの日本の父までが3.0点以上である。

はっきりと差があるのは最も低い第1グループで，他のグループとは明らかに区別された。この第1グループは，日本の中学生男女と日本の高校生男子から構成されている。言い換えると，日本の中学生男女と日本の高校生男子は自律的恥意識が最も弱いということになる。

反対に，日トの父母とトルコの中学生女子は自律的恥意識が強い。

他律的恥意識の多重比較の結果（表7）では，7つのサブグループが見出された。日本の母が最も得点が高く，単独で第7グループを形成している。第6～第4グループまでの差はあまり明確ではなく，日本の父，トルコの父母，トルコの女子，次いで，日本の高校生と大学生の女子という固まりと見てよいであろう。

得点の低い方である第3～第1グループは，日本の中学生女子を含んでいるが，その他は男子という固まりである。

したがって，他律的恥意識に関してはおおむね，大人，女子，男子という順になっているようだ。

表7　他律的恥意識の多重比較の結果

		1	2	3	4	5	6	7
7.00	日本：高校生：男子	2.65						
13.00	トルコ：高校生：男子	2.76	2.76					
6.00	日本：中学生：女子		2.80	2.80				
5.00	日本：中学生：男子		2.81	2.81				
11.00	トルコ：中学生：男子		2.87	2.87				
9.00	日本：大学生：男子			2.91				
14.00	トルコ：高校生：女子				3.03			
8.00	日本：高校生：女子				3.03			
12.00	トルコ：中学生：女子				3.12	3.12		
10.00	日本：大学生：女子				3.13	3.13	3.13	
3.00	トルコ：父					3.20	3.20	
4.00	トルコ：母					3.21	3.21	
1.00	日本：父						3.24	
2.00	日本：母							3.39
	有意確率	0.06	0.06	0.08	0.12	0.14	0.07	1.00

注）多重比較はDuncan，サブグループの基準は5%未満

他者同調的恥意識の多重比較の結果（表8）では，6つのサブグループが見出された。最も高い第6グループは，日本の女子とトルコの中学生から構成された。どの年代をとっても，他者同調的恥意識が同程度に高いということは，日本の女子の特徴であろう。

表８　他者同調的恥意識の多重比較の結果

	1	2	3	4	5	6
1.00 日本：父	2.58					
13.00 トルコ：高校生：男子		2.71				
3.00 トルコ：父		2.78	2.78			
4.00 トルコ：母		2.80	2.80	2.80		
9.00 日本：大学生：男子		2.82	2.82	2.82		
2.00 日本：母		2.83	2.83	2.83		
5.00 日本：中学生：男子			2.84	2.84		
7.00 日本：高校生：男子			2.85	2.85		
14.00 トルコ：高校生：女子			2.91	2.91	2.91	
11.00 トルコ：中学生：男子				2.93	2.93	2.93
12.00 トルコ：中学生：女子					3.01	3.01
10.00 日本：大学生：女子						3.03
8.00 日本：高校生：女子						3.04
6.00 日本：中学生：女子						3.05
有意確率	1.00	0.06	0.06	0.06	0.07	0.06

注）多重比較は Duncan，サブグループの基準は 5%未満

また，最も低い第１グループは日本の父親が単独で構成している。恥ずかしいと思うことが，日本の父母の間で，また父親と子供との間でかなり違いがあるということが日本の特徴であるかもしれない。

考察

日本の生徒用の恥意識項目から，学校場面や親からの叱責など親には回答できない項目７項目を削除して 18 項目による親の恥意識項目を作成した。これを基に日本とトルコの文化比較と中学生，高校生，大学生，親の世代間比較を行った。

まず，18 の恥意識の項目を構造化するために，日本の親から得られたデータにより，探索的に因子分析を行い，最尤法，プロマックス回転，３因子抽出でまとまりの良い結果を得た。第１因子は，５項目から構成され，公共の場面における行為についての５項目で構成され，「他律的恥意識」と命名した。

第２因子は，６項目から構成され，このうち５項目が日本の生徒の因子分析における「他者同調的恥意識」の項目であったため，ここでも「他者同調的恥意識」と命名した。

第3因子は，7項目から構成され，全ての項目が日本の生徒の因子分析における「自律的恥意識」であったため，ここでも「自律的恥意識」と命名した。

この3因子構造は，生徒の25項目の因子構造とほぼ同一であった。つまり，恥意識のこの3因子構造は，少なくともわが国では年代を超えて普遍的な構造だと考えられる。そして，この共通する構造において，世代間には強弱の違いがあると言える。

そこで次に，この3因子を基に層別の比較を行った。

分散分析の結果，3つの恥意識について，グループ間に有意な違いがあった。

自律的恥意識の多重比較の結果，最も得点の高いグループは，トルコの父母とトルコの中学生女子，それに日本の母であり，日本の父も高いほうである。日本の中学生男女と日本の高校生男子など，日本の若年層は自律的恥意識が弱い。

他律的恥意識の多重比較の結果，日本の母が最も得点が高く，得点の低いグループは，日本の中学生女子を含んでいるが，その他は男子という固まりである。したがって，他律的恥意識に関してはおおむね，大人，女子，男子という順になった。

他者同調的恥意識の多重比較の結果，最も高いグループは，日本の女子とトルコの中学生から構成された。最も低いグループは日本の父親が単独で構成している。恥ずかしいと思うことが，日本の父母の間で，また父親と子供との間でかなり違いがある，つまり，男の親は弱く，女の子どもは強いという違いがあるということが日本の特徴である。

以上のことから，恥意識の強さは文化と世代によって質的に異なると言える。つまり，世代や文化によって恥意識が強い，弱いというのではなく，恥を感じる場面が異なるということである。

日本の親は，自律的恥意識と他律的恥意識が強いのに対して，子どもは他者同調的恥意識が強いことが特徴である。また，女子は他律的恥意識と他者同調的恥意識が男子より強いという傾向があった。

このようなことは，日本の若年層で問題行動を抑止する恥意識が弱いことを示している。親の世代では，むしろこのような恥意識が強いのである。このことは，わが国における恥意識の質が変容した可能性を示していると考えることが妥当であろう。つまり，わが国の若年者の問題行動の原因は，それを抑止するはずの恥意識が弱くなったことにあると考えられる。

文献

堀内勝夫，中里至正，松井　洋，中村　真，永房典之，鈴木公啓　2005「恥意識の構造」日本パーソナリティ心理学会第14回大会発表論文集。

堀内勝夫・中里至正・松井　洋・中村　真・永房典之　2004　恥意識の行動抑制効果に関する研究（1）—価値観との関係—　日本社会心理学会第45回大会発表論文集　526

松井　洋　1991,「青年期における愛他行動の発達とその規定因」,『川村学園女子大学研究紀要』第2巻 181・193.

松井　洋・中里至正・加藤義明・瀬尾直久・石井隆之　1995「愛他性の構造に関する国際　比較研究」『日本心理学会第59回大会発表論文集』, 173.

松井　洋　1997,「愛他性に関する国際比較研究—米国，中国，韓国，トルコ，日本の中学生・高校生を対象として—」『川村学園女子大学研究紀要』第8巻　第1号, 107–119.

松井　洋・中里至正・石井隆之, 1998,「愛他性の構造に関する国際比較研究」,『社会心理学研究』, 第13巻，2号, 133–142.

松井　洋　1998,「中学・高校生の思いやり意識—日本・中国・韓国・アメリカ・トルコの愛他性の国際比較研究—」, Health Sciences, vol.14, no.2, 45–55, 日本健康科学学会.

松井　洋　1998,「愛他性に関する国際比較研究・—日本，中国，韓国，アメリカ，トルコ，キプロス，ポーランドの中学生・高校生を対象として—」,『川村学園女子大学研究紀要』第9巻，第1号, 175–186.

松井　洋　1999,「日本の中学生・高校生の価値観に関する研究—日本，アメリカ，中国，韓国，トルコ，キプロス，ポーランドとの国際比較研究—」,『川村学園女子大学研究紀要』第10巻　第1号, 131–153.

松井 洋, 2000,「日本の若者のどこがへんなのか —中学生・高校生の国際比較から—」,『川村学園女子大学研究紀要』, 第11巻，第1号, 101–114.

松井 洋・中里至正・石井隆之，2000,「中学生の親子の心理的距離」,『日本心理学会第64会大会論文集』, 190.

松井 洋, 2001,「日本の中学生の親子関係」,『川村学園女子大学研究紀要』, 第12巻，第1号, 101–114.

松井 洋, 2002,「日本の中学生の親子関係と非行的態度」,『川村学園女子大学研究紀要』, 第13巻，第1号, 105–119.

松井　洋，2003,「親子関係と子どもの道徳性—日本，アメリカ，トルコの中高生の比較—」,『川村学園女子大学研究紀要』, 第14巻，第1号, 85–99.

松井　洋，2004,「社会的迷惑行為に関する研究」,『川村学園女子大学研究紀要』, 第15巻，第1号, 55–68.

松井　洋・中里至正・中村　真・堀内勝夫・永房典之　2004,「恥意識の行動抑制効果に関する研究（4）—社会的迷惑行為に対する恥意識と罪悪感—」,『日本社会心理学会第45回大会発表論文集』, 522.

松井　洋，2004,「少子化とバーチャルリアリティの時代の子どもの社会性」,『児童心理』, Vol.58, no.2. 16–21. 金子書房 .

松井　洋・中村　真・堀内勝夫・石井隆之 2005「非行的態度の抑制要因に関する研究」,『川村学園女子大学研究紀要』, 第16巻，第1号, 27–44.

松井　洋・中里至正・中村　真・堀内勝夫・永房典之・鈴木公啓　2005「恥意識と道徳意識の関係」『日本パーソナリティ心理学会第14回大会発表論文集』, 522.

松井　洋・中村　真・堀内勝夫・石井隆之 2006,「「子ども」—比較文化研究からみた日本の子ども—」,『川村学園女子大学研究紀要』, 第 17 巻, 第 1 号, 51–70.

永房典之・中里至正・松井　洋・中村　真・堀内勝夫　2004,「恥意識の行動抑制効果に関する研究（2）—非行的態度との関係—」,『日本社会心理学会第 45 回大会発表論文集』, 524.

中村　真・中里至正・松井　洋・堀内勝男・永房典之　2004,「恥意識の行動抑制効果に関する研究（3）—親に対する心理的距離が恥意識の形成に及ぼす影響—」,『日本社会心理　学会第 45 回大会発表論文集』, 520.

中里至正・加藤義明・杉山憲司・松井　洋・瀬尾直久 1992,「非行抑止要因の文化差に関する研究—日本・韓国・米国・中国の高校生を対象として」,（財）日工組調査研究財団　全 117 頁.

Nakasato, Y. & Matstui, H., 1993 Altruistic Attitudes of Japanese Youths. International Journal of Psychology, vol.27, p562.

Nakasato, Y. & Matstui, H., 1996 A Structure of Altruistic Attitudes -A Comparison of American, Chinese, Korean, Terkish and Japanese Youths-. International Journal of Psychology, vol.28, p48.

中里至正・松井　洋（編著）, 1997『異質な日本の若者たち』, ブレーン出版.

中里至正・松井　洋　1999『日本の若者の弱点』, 毎日新聞社 .

中里至正・松井　洋　2003『日本の親の弱点』, 毎日新聞社

1）本研究の実施には平成 16 年度— 18 年度, 川村学園女子大学教育研究奨励費の研究助成を受けた（代表　松井洋）。

2）また, 平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）, 代表　松井洋, 課題名「非行の抑制要因としての恥意識に関する研究」）の助成を受けた。

3）本論文は, 本論文の著者の他に, 東洋大学：中里至正, 永房典之, 鈴木公啓との共同研究の成果である。